

遠い通学路を帰ると

祖母の味噌焼きおにぎり

「けえ」とひと言

食えるという行為は空腹を
満たすだけでなかった

農と食
の邂逅

伊藤 恵子 さん

宮城県美里町

株式会社はなやか 代表取締役

その人は、おふくろの味を特徴にした菜園レストランをオープン。そのわずか3カ月後、東日本大震災に見舞われた。それから避難所への弁当配達が始まった。祖母の想いの詰まった、3カ月、200食余——。本誌2011年8月号で紹介した、その人を再訪した。





19頁：震災直後、避難所に届ける弁当をつくる恵子さん。「届くのが毎日楽しみ」というお年寄り、食が細くなった子どもがこのお弁当はちゃんと食べてくれてうれしいという母親の声がいまも記憶に残っているという（2011年6月撮影）
20頁：（右）魚市場で仕入れる食材を吟味する（11年6月撮影）
（左上）「野の風」に隣接する畑にて。震災後、畑を15^{ヘクタール}増やした（20年12月撮影）
（下）従業員数は12人。「食堂、加工、農業」といろんな仕事があるから、コロナ禍にあっても雇用が維持できているのだと思います（20年12月撮影）



資料…復興庁「東日本大震災からの復興の状況と取組」（2020年9月）、緊急災害対策本部「2011年東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について」（2020年3月10日）
注…人的被害、住家被害、避難者数は2020年3月1日現在。

■避難者数 4万7737名

一部破損…7万8461戸

半壊…2万2941戸

全壊…12万1996戸

■住家被害

死者1万9729名（災害関連死を含む）
行方不明者数2559名

■人的被害

各地で大津波を観測（最大波…相馬9.3メートル以上、宮古8.5メートル以上、大船渡8.0メートル以上）

■津波

震度6弱…若手県沿岸南部・内陸北部・内陸南部、福島県会津ほか

震度6強…宮城県南部・中部、福島県中通り・浜通りほか

震度7…宮城県北部

震度7…宮城県北部

■各地の震度

震源および規模
三陸沖 モーメントマグニチュード MW9.0

■発生日時

2011年3月11日（金）14時46分

東日本大震災



回想／ドキュメント・伊藤 恵子

あの日 あれから 日々、一歩前へ

(2011年6月撮影)



食や農に寄り添い続けて

青山 浩子（新潟食料農業大学講師・農業ジャーナリスト）

河野 千年（本誌特派 フリーカメラマン）

伊藤恵子さん（68歳）は、10年前と変わらぬ笑顔で出迎えてくれた。

恵子さんは、宮城県河南町（現、石巻市）出身で、稲作と酪農を営む専業農家に嫁ぎ、2人だった経営規模を夫の昇さん（73歳）と徐々に拡大。2001年、美里町内に農産物直売所「花野果市場」が開設されると同時に、公募により、直売所内の食堂「はなやか亭」の運営を始めた。その前年、乳がんを患い、「やりたいことを何でもやろう」と決意を固めていた。「はなやか亭」の運営は、長年の夢を実現する出発点となった。味噌焼きおにぎりなどおふくろの味を前面に出した料理は好評で、06年には近くにある茅葺きの民家白山堂を借りて、農家レストランも開いた。白山堂の賃貸の契約更新がかなわず、みずから建物を建てることにした。自己資金を元手に、融資と助成金を活用し、10年12月20日、日本家屋の菜園レストラン「野の風」がオープン。同年、法人化も果たす。そのわずか3カ月後に東日本大震災に見舞われた。

3カ月に及ぶ避難所への弁当配達

東日本大震災の直後は、毎日、200食以上の弁当をつくり、2カ所ある避難所に届けていた。朝4時には「野の風」に併設する加工施設で準備を始めた。当時、猫の手も借りたいほどの忙しさにもかかわらず、車で20分ほどの、津波で大きな被害を受けた沿岸に案内してくれた。「私はいろんな人に助けられて

ここまでこられた」——。恵子さんが、一呼吸おいて語った言葉はいまも頭に残っている。「弁当の配達は必要とされるまで続けます」——。

2011年5月下旬から始まった弁当の配達は、避難所が閉鎖される8月下旬まで休むことなく続いたという。弁当の配達をきっかけに交流も生まれた。避難所に身を寄せる人々に「うちの田んぼの田植え作業を手伝ってもらえば」と声をかけたところ、5人が名乗りをあげた。当日、汗を流してくれたお礼を包んで渡そうとした。するといったん受け取ったものの、切りのいい金額になるようにお金を足し、再び恵子さんのももに持ってきた。「自分たちよりもつらい思いをしている人に使ってほしい」と。東北地方の人々の情深さを知るエピソードであり、恵子さんの胸に今でも残るひと言だという。

震災から半年経った頃、「野の風」にうれしい来客があった。大きな被害を受けた石巻市からお客さんが来てくれたのだ。「ようやく車が手に入ったから」という言葉に、徐々に日常を取り戻そうとする様子がうかがえた。別のお客さんからは、10種類以上のおかずが並ぶ野の風ランチを注文したうえで、「悪いけど、持ち帰り用にもう1人分つくってける」と言われた。店まで来られない家族が楽しみにしているのだという。

震災から10年が経とうというこのタイミングでの思いを尋ねてみたが、「そうだね」と恵子さんはしばし考え込んだ。「一見すると、落ち着いたように見えるかもね。でも、人々の心の復

興はまだまだ。経験した人でないとわからないことだと思います」と、言葉を選ぶように話してくれた。

10年という期間は確かに区切りとしてわかりやすい。だが、被災した人々や地域にとつては一つの通過点であり、その前と後で特別何かが変わるわけではない。恵子さんにとつても同じことだろう。

弁当の配達には、傍からは「被災者への支援」に見える。しかし、農村で起業した女性農業者の多くがそうであるように、収益だけではない食や農の魅力を伝えんとする強い意思で、恵子さんはこれまで奮闘してきた。それが、震災直後は避難所への弁当というかたちとなって表れたということ。震災から10年経とうと、20年経とうと、食べる人に寄り添い続けるであろう恵子さんに、「10年」を象徴する言葉を引き出そうとした自分を少し恥じた。

あらゆる依頼に真心で対応

食べるという行為は、単に、空腹を満たすだけのものではない——。この想いが、恵子さんが業を起した原点だ。小学生のとき、片道40分かけて学校から帰ってきた恵子さんを喜ばせてくれたものが、祖母がつくる味噌焼きおにぎりであり、はつと汁(すいとん)だった。「けえ(食べなさい)」という祖母のひと言とともに、おなかを満たす瞬間。何ものにも代えがたい喜びだった。この味がもたらすやすらぎ、喜びを多くの人に届けたいと「はなやか亭」を始めた。

現在は、2軒の食堂を切り盛りするとともに、直売所や食品スーパーなどに、惣菜や餅などさまざまな農産加工品を納め、さらにはディケアサービスセンターに弁当を納めるなど取引先は多岐にわたる。法人化して3年目には目標としていた1億円の売上高を突破し、現在も維持している。

弁当パックにおかずを詰める作業をしていると、容器に小さなすき間をみつけた恵子さんが発する口癖がある。「ここに

何か入れよう」というひと言だ。すかさず周囲のスタッフから「あ、また(オーナーの口癖が)始まった」と苦笑されると。「何か入れなくなってしまう。やっぱり喜んでもらいたいから。商売だけというより、喜んでもらいたい。それが回りまわると自分に返ってくるのかなって」

そんな旺盛なサービス精神だけで納め先が増えたわけではない。現在の取引先は、すべて先方からの依頼によるもの。「お願いされたら絶対に断らないから(笑)」と恵子さん。恵子さんが提供する料理や惣菜は、すべて手づくりで、手間ひまのかけ方は半端なものではない。スタッフから「そんなに引き受けて大丈夫？」と心配される。「やってみて無理なら、立ち止まって考えればいい。そういつてすべて引き受けました」と笑い飛ばす。

弁当や惣菜から伝わってくる温かさや、やさしさ。そして、少々無理なお願いであっても断ることなく、前向きに受け止める経営者魂。これらが食べる人に伝わらないわけがない。恵子さんは前回も今回も「ここまで来られたのは、周囲の人に恵まれてきたおかげ」と繰り返し返した。それは、恵子さんの食への想い、経営者としての踏ん張り、周囲の人々に伝わっている証でもある。

一つの野菜から生まれる触れ合い

起業から20年目を迎え、スタッフも12人に増えた。以前は、陣頭に立って切り盛りしてきた食堂、農産加工とともに、多くの作業をスタッフに任せている。「はなやか亭」は長男の嫁、重美さん(38歳)がメインで担うなど、経営承継を着実にすすめてきた。「私の仕事といえば畑作業と、塩釜や仙台の漁港に魚を仕入れに行くことぐらい」とうれしそうに微笑む。

なかでも「とにかく夢中になれる」のが畑仕事。畑に立つと、山形県との県境にある船形山からの吹きおろしの強い風が吹く。「強すぎて大変な時もあるけど、暑い夏は風のおかげで生

き返る。もう少し頑張ろうと励みにもなる」。経営も同じだろう。時に向かい風を受けるが、周りの人の支えが追い風になる。「野の風」という店名はまさに言い得て妙だ。

畑は、食事を終えた客と会話をはずませる貴重な場でもある。「立派なナスだね。一本もらってもいい？」という人に、恵子さんは「本だけって、何に使うの？」と聞くと「味噌汁の具にしたい」とのこと。「一本といわず」と恵子さんはすすめる。オクラの大きな黄色い花に驚く人が多く、「これは何の花？」とよく聞かれる。目の前にオクラの実が空に向かってなっているのに、である。「キュウリやナスのように実は下を向いてなるもの」と思うのか、気づかない人が多いみたい。こうやって野菜一つから会話が始まり、触れ合いが生まれるんです――。

「菜園レストラン 野の風」と名付けたのは、畑と食べる場所を近づけたいという恵子さんの願いが込められている。その想いは現実のものとなった。食べることを介し、さりげない会話があふれ、農業が食べる場所の近くにあることを知ってもらおう。

農と食のつながりを子どもたちに

多くの触れ合いを生んだ「野の風」も2020年は、コロナ禍で食事に訪れる人の数が前年に比べ減った。そんななか「代わりに、弁当を頼む」「仕出しとして届けて」と注文してくれるお客が少なくない。減ったことを憂うのではなく、注文してくれることを大切に思う恵子さんだ。

また、コロナを機に、手が空いているスタッフには、畑の作業をしてもらうようにした。「自分で種まきからやって、それを料理してお客さんに出す。なんか楽しそうにやっているみたい」。スタッフと畑の距離が近づき、恵子さんはまんざらでもなさそうだ。

みずからの事業以外にも、恵子さんは重責を担っている。1999年、美里町初の女性農業委員に選出され、宮城県内の女性農業委員でつくる組織の代表に就任した。2014年に

は、全国女性農業委員ネットワーク会長になり、農業における女性参画を重要視し、そのための環境づくりに努めてきた。これらの活動は高く評価され、農林水産祭の「女性の活躍」部門で、内閣総理大臣賞に輝き（2016年度）、黄綬褒章も授かった（2019年度）。現在は、美里町農業委員会の会長として、平日は役場で農業委員関係の仕事にあたることが多い。

それでも恵子さんの視線は相変わらず生産現場に向けられている。「子どもたちへの農業体験をこれからも受け入れていきたい」と抱負を語る。東日本大震災で避難を余儀なくされた地域の小・中学校の生徒をたびたび受け入れた。最初は水田に入ることをためらう子どもたちが夢中で遊ぶ様子を何度も目にした。「自然の力は大きい。いじめなどの問題もあるけれど、こういう体験が子どもにとって何かしら役立つと思う」と恵子さん。

ある子どもから「おばちゃん何している人？」と聞かれ、「おにぎりを握っているんだよ」と答えると、「おにぎり？ コンビニで売っているやつ？」と言われたそう。農村に暮らす子どもであっても、農と食のつながりがなくなっていると感じる。「米さえあれば、だれでもおにぎりが握れることを知ってほしい」と恵子さん。

「野の風」はランチ時間を終え、店内には静けさが漂っていた。それなのに不思議だ。手づくりのやさしい味が好きで訪ねて来るファン、畑で会話を交わす客、恵子さんが届けた弁当を避難所でおいしそうに食べる人々が思い浮かぶ。「野の風」を囲んで、人々の笑顔が幾重にも折り重なっているように見える。これこそが恵子さんがつくり上げた財産だろう。お嫁さんの重美さんに「どんなお義母さんですか」と聞くと、「見たまんまの人。好きなこと思いっきりやっているお義母さんです（笑）」と即答してくれた。

恵子さんはこれからも、それを天職と確信し、食べる人たちのそばに寄り添い続けるのだろう。

